左目のサングラスの戦士

ICA国際小学校六年　中野　麗良

私の兄はムッキムキにマッチョな高校一年生。にぃにと呼んでいる。にぃには、私と同じ小学校を卒業してからも、国際系の学校に通っている。寮にいながら、難しいIBのお勉強をするだけでも凄いのに、野球部に所属している。お勉強と部活と試合だらけで、家に帰れるのは年に僅か数日だけど、私とにぃにの絆は固いから寂しくない。優しいにぃにはいつも私を励ましてくれるから。

そんな優しく逞しいにぃにが、一週間前の野球部の練習試合中に大怪我をしてしまった。スライディングで点をいれた瞬間、焦った相手チームが百二十キロの送球をにぃにの顔面に当ててしまったのだ。にぃにの右目と鼻からは瞬く間に血が大量にでた。瞬く間に床に倒れ、「目が見えない。」とパニックになった。すぐに観覧席にいた医師の保護者が

飛び出してきた。会場は茨城県の田舎。すぐには救急車がつかないとのこと、その保護者が迅速に救急車を呼んでくれた。

受験生の私はその時、塾もある日だったので、医師のパパと妹と三人で東京の自宅にいた。オペラ歌手のママは滋賀県で公演中だった。にぃにの試合にいた保護者から連絡をもらってショックをうけたママが、泣きながらパパに電話をして、私はその事実を知ったのだ。雷が落ちたみたいにびっくりして、頭の中が真っ白になった。そしてママの公演中も携帯は鳴り響く。救急隊員から連絡がきた。電話越しから聞こえる救急車のサイレン。休日で眼科医が捕まらず、にぃにはたらい回しにされていたのだ。私たちは生きた心地がしなかった。心の中でずっと（早くにぃにを助けて！）と叫んだ。

搬送先が決まったのは一時間後。本番を終えたばかりのママは、なかなか搬送先が決まらなかった地方の医療体制にすごく怒ってい

た。その怒りは鬼のようだった。でも、お客さんや関係者が全く気づかなかったくらい、ママは平然と本番の仕事をこなし、すぐにママも滋賀県をあとにして病院へ向かったと、後からママのマネージャーに聞いた。ママのプロ根性は、本当にすごいと思った。オンコールだったパパも、仕事で緊急オペに呼ばれないように手配してから、慌てて茨城のにぃにの搬送先へ向かった。私は家で妹の面倒を見てあげた。小三の妹も心配そうにして、口がへの字になっていた。二人で手を握りあった。

深夜、パパが病院からにぃに達と一緒に東京のお家に帰ってきた。誰だかわからないくらい、パンパンに腫れてしまっていた。赤いメロンみたいだった。それでもにぃにが最初に言った言葉が忘れられない。

「絶対に大会に出る。何が何でも出る。」

一週間後にせまった全国軟式高校野球大会、軟式の甲子園。誰もが夢見る甲子園が、もう

目と鼻の先なのだ。私は胸が詰まった。医師達からは当然出場の許可が出ていなかった。しかし、その言葉を聞いたママは言った。

「絶対に出るよ。くよくよ絶望している暇はないよ。一刻も早く治すよ。毎日病院行って、いっぱい寝て、ささっと医者の出場許可をとるからね。更に強くなって絶対に全国大会に出るのよ、レオ。」

にぃにはパンパンの顔を、ぐちゃぐちゃに涙で濡らした。そして、一気に安心したのか、試合でドロドロの土まみれのまま、座ったままぐっすり寝だした。ママはずっとそばでトントンしてあげていた。

それから通院の日々が始まった。パパの勤める病院に通って、パパ達による医師の懸命な治療を受けられた。そして私はびっくりした。朝を迎える毎に、顔の腫れがあっという間にひいていくにぃにの回復力は、化け物かと思った。いや、にぃには、本物の化け物だった！通院から五日目に、ついに医師達か

らの出場復帰許可が得られたのだ！しかし、まだ鼻のヒビと、右目の瞳孔は閉じていないから、油断はできないとの忠告つきだった。でも、にぃにに迷いはなかった。帰宅時の宣言通りに、にぃには出場許可と同時に部活に復帰した。開会式の二日前のことだった。ギリギリ、甲子園への出場に間に合った。

翌日、私は英検を受けた。準一級の試験、絶対に受かりたい。にぃにからもらったパワーは私を前向きな気持ちにさせてくれた。英検のあと、私たちはすぐに兵庫県へ向かった。

開会式。いよいよ軟式甲子園が始まった。ママは、涙でいっぱいだった。このグラウンドに立てていることさえが奇跡だとママは言った。

そしてその翌日、ついに試合が始まった。にぃには、怪我で五日間も休んでしまったブランクを感じさせない強さで、変わらずスタメンだ。かっこいい。まぶしくて、太陽みた

いだった。キラキラに輝いていた。高校一年生なのに、背番号四番、八番バッターとして、早速盗塁に成功し、ホームベースへ飛び込んだ。目には、いつもはしていないサングラス。このサングラスは、ママがにぃにに持たせた、怪我で閉じにくくなった瞳孔を眩しさから守るためのお守り。ほぼ左目しか見えていない「左目のサングラスの戦士」は、めちゃくちゃスーパーヒーローに化けた。やっぱりにぃには化け物だ！

第一試合も、準々決勝戦も、準決勝戦も左目のサングラスの戦士は、勝ち抜いた。私は毎日明石の甲子園に足を運んだ。二試合連続でヒットを出した決定打者でもあり、足の速さで点を勝ち取った唯一の高一スタメンでもあり、人生で初めてヒーローインタビューを受けたサングラスの戦士。たくさんの新聞にもテレビにも、にぃにが大きく報じられた。めちゃくちゃすごいと思った。私は思った。

「にぃには本物のヒーローになった！」

しかし、こんなに勝ち進むとも思っていなくて、受験生の私は一度、翌日の塾やオープンスクールの為に東京の自宅に戻らなければならなくなった。帰りたくなかったけれど、仕方なく帰った。晴れた空に少し雨が降った様な気分になって、心がむず痒くなった。

翌日、ママと妹は朝五時発の始発でまた兵庫県に戻った。いよいよ決勝戦。私は親友のヒサキちゃんとケイトちゃんと一緒に近くの中学校のオープンスクールに向かった。夏休み中に会う親友との時間は、とても楽しかった。嬉しかった。同時に、心の中ではずっとにぃにぃにパワーを送り続けた。ちょくちょく携帯で、にぃにの生中継やニュースもチェックした。プロの野球選手のように、プロによる実況付きで放送される軟式甲子園のその様子は、すごく白熱した。みんなが観ていた。

前半戦、ゼロ対ゼロ。強敵相手に、サングラスの戦士の攻撃はすごかった。しかし、後半戦、一気に点をとられた。みんな目がウル

ウルしていたのが、中継越しにも伝わっていた。負けてしまった瞬間、サングラスの戦士はグラウンドに倒れた。泣き崩れた。その様子を見たみんなも、一緒に胸がギュッと締め付けられた。でも、そのあと、ニコっといつもの笑顔に戻った様子も見れて、安心した。達成感に溢れた笑顔に、感動して涙が出た。

それから閉会式と、表彰式、国歌斉唱や退場行進があった。サングラスの戦士の胸に輝く銀メダルは、キラキラ輝き、まるでダイヤモンドに見えた。私には、銀メダルや金メダル以上の価値があると確信できた。

春から続いた予選、県西大会、県大会、北関東大会、そしてこの甲子園・全国大会。サングラスの戦士は、この甲子園の最終日まで一度も負けることなく勝利し続けてきたのを、私は側でずっと応援してきた。受験勉強もやりながら、朝早くから大会に応援に行った日もいっぱいあって大変だったけれど、サングラスの戦士が怪我も乗り越えて頑張った

のをよく知っているから、誰よりもにぃにを誇りに思える。私はにぃにに、「全国二位って本当にすごい！国体への出場決定もおめでとう！」とLINEした。すぐに返ってきたにぃにからのドヤ顔スタンプに、なんだか心が温かくなって、ほっこりした。

その後の新聞やニュースも、にぃに達の記事で溢れていた。ママと妹が夜に東京に帰ってきた。ママもパパも一目散にビールを開けた。見逃し配信で試合を見直しながら、にぃにの話でいっぱいの夕食は、いつも以上に賑やかで楽しかった。嬉しかった。優しいパパはいつも以上にニコニコで、兵庫県産のお酒をいっぱい飲んでいた。

さて、明日から学校が始まる。今日はよく寝よう。

「サングラスの戦士、最高の夏休みをありがとう！」